
心層探索

北見滝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心層探索

【Nコード】

N0830M

【作者名】

北見滝

【あらすじ】

中学校の入学式から、一カ月後。少し人と違う力を持つ来栖紅葉は着々とクラスにおける自分の地位を築いていた。

そんな中、ある事件がクラスにおきる。始めは教室で飼育している金魚、次は校庭で飼われているウサギが無残に殺された。そしてついに人間が……。

序章 閉幕（幼年期）

当初、私は夢を見ているのだと勘違いしていた。ただ、どうやら私は聡かったのだろう。すぐに自分の異常を認識できた。

そして、それを受け入れた。
そして、それを活用した。

その時私は幼稚園の年少組。ようやく物心のついた時期。子供ながらに覗いてしまった世界の裏側は、大好きだった妖精たちの絵本が、夢を語る大人が、目の前に用意されているはずの輝かしい未来が、全て嘘っぱちであること理解するのには十分だった。

始めは戸惑ったし、絶望も感じた。
それはそうだろう。

仲の良いと思っていた友達が、心の奥底では私に対して激しい嫌悪感を感じていることも、仲睦まじく見えた私の両親は、お互いどうしようもないぐらいに修復不可な関係であることは、夜になると受動的に、強制的に私は知ってしまうのだから。

だけど、どうやら私は聡く、そして前向きな性格だった。
自分の異常、異様、異能を認めそれを隠蔽したのだ。

世界が醜いからどうしたのというのだ。
世界が汚れているからどうしたというのだ。

せつかく生れ落ちたこの世界。しかもクソツタレな神様からの贈り物。^{ギフト}

世界の裏舞台を覗くチート行為。腐った世界を更に腐らせる過激なスパイス。

ならばこの能力を持って、私はこの世界で遊んでいこう。

……あまりにも長い暇つぶし、やる気の萎える攻略本（裏改造マニュアルつき）。

まだあどけない幼稚園児の私は、卑屈に笑いながらそう誓ったのだ。

今思えば、それは絶好のタイミングで、あまりにも早い幼年期の終わりだった。

序章 閉幕（幼年期）（後書き）

初投稿です。

気軽に楽しんでもらえたら幸いです。

日常風景・家族（虚実）

目を開けると見慣れた自分の部屋の天井が確認できた。

枕もとの時計を確認する。午前六時ジャスト、いつもより三十分早く起きてしまった。

だからといって布団の中でうだうだしている気分ではなかった。

夢見が悪すぎる。

ガバッと勢いよく掛け布団をはいで、立ち上がる。

大きく深呼吸。む、ちよっと部屋の中が埃っぽい。

このごろ忙しくて掃除をサボっているのだ。イカンイカン、花も恥らう女子中学生とあろうものが。

けど、次の週末は部活の練習試合だしな！。

なんて、取り留めない事を考えながら窓を開ける。

差し込む朝日がまぶしい、五月一日、このごろ日が昇るのが早すぎる。

身支度を整えて一階のキッチンへ。朝ご飯の支度をしていたお母さんに朝の挨拶。

「おはようー、今日の新聞どこ？」

「あら、おはよう。今日は早いじゃない？何か用事でもあるの？」

「ううん、別に目が早く覚めただけー」

今のテーブルに置いてあった新聞を発見。

げ……、手に取ろうとしたら嫌なものを発見してしまった。

新聞の上にこれ見よがしに置いてある封筒。月に2、3回届く我が家の不幸の手紙。

「あ、お父さんからの手紙きてるでしょ？読んで返事書かなくっちゃね」

なんでもないことのようにお母さんが言う。いや、実際はどうでもいいことかな。

「りょかいです。とりあえず学校から帰ってから読むね」

正直、今のテンションで読むのはきつい。新聞のテレビ欄をチェック。

「あらあら、お父さんも可哀想に。単身赴任先でがんばってるのになえ」

お前が言うな、と言いたい。

実際お父さんの単身赴任を一番喜んでいたのはお母さんだし。

いや、両方とも喜んでいたんだっけ？

お母さんは、お父さんと同じ家で暮らしたくなくて、でも現実を気にして、お金が必要だった。

お父さんは、お母さんと同じ家で暮らしたくなくて、でも世間体を気にして、別れたくなかった。

そんな時に届いた会社からの栄転と言う名の異動命令。

二人にとっては渡りに船。

かくして、何も揉める事無くお父さんの単身赴任は決まったのだ。ちゃんちゃん。

唯一誤算があるとすれば、私には全て筒抜けだったと言うこと。

二人は隠そうとしていたみたいだけれども。

朝ご飯を食べ終えて、再び二階の自分の部屋へ。

数学のノートを忘れていないかチェック。本日のキーアイテムっぽいしね。

鏡で最終チェックを行い、鞆を持って玄関へ。

今日の予習・しこみはバッチリだ。胸糞悪くなる課題が少々あるがいつものこと。

それではいつもの様に、味気ない一日の始まり始まり。

「それじゃあ、いつてきます」

登校（調律済み）

秋里私立中央中学校。今年の春から私が通っている中学校だ。何のてらいも無い、平凡な公立の中学校。

実際、小学校高学年の頃は先生からは私立の中学受験を進められたりもした。

だけど、偏差値の高い中学だろうが、お嬢様学校だろうが私には関係なかった。

そこに意思の持つ人間が大勢いることだけで、私にとって学校生活は最早ゲーム感覚。

だったら、通学に時間のかからない地元に通うことを私は選ぶ。

……正直な話、高学歴といった看板よりも、時間の方が私にとっては何倍も重要なのだ。

花は短し遊べよ乙女ってね。

キュツキュツキュツ。まだ新しい上履きが木造の廊下を軋ませる。廊下の開いている窓から差し込む陽光と、五月の緑の匂いは古臭い校舎の匂いとあいまって、屋内にいながら、外を歩いているような錯覚を覚える。

1 - 3 組。この春から私が通っている教室だ。

カラカラと引き戸をスライドして教室に入る。

「あー、もみじん。おはよー」

人を怪獣みたいに呼び捨てて、サイドポニーの女の子がトコトコと近づいてきた。

「おはよう。ゆっこ。今日は早いんだ？」

ゆっこは私の前の席の机に行儀悪く腰をかける。

「うん。今日はなんか暑くてさー。早めに解散なのよう。あれ、もみじん、部活はー？」

「今日はお休み。てゆうか、今日からテスト休みじゃなかったけ？
実力テストの」

私は席について、鞆の中身をチェックしながら相槌をうつ。
数学のノートは……あ、あったあった。取り出しやすい位置に移動
しておく。

「そだよー？ 部活は今はテスト休み中ー」

「……えーと。じゃあ、今日は何が早めに解散だったの？」

本当は知っているけれども。さも、不思議そうな顔で私は疑問を口
にする振りをする。

ゆっこは、その場でテニスのサーブの打つように腕を振り、

「自主練なのだー」

と朗らかに笑う。あー、この子の邪気の無さ、むかつくほどに眩し
い。

「ふふふ、秋の新人戦。レギュラーはもらったぜ！」

まだ何も得ていないのに、その場で勝利のVサイン。

「おー、燃えてるねー」

「ふふふ、燃える闘魂ゆっこさんとはあたしのことよ！」

「頼むからその場で、張り手とかしないでよ？」

「元気ですかー！！！」

「やめい」

張り手より先に私のチョップがゆっここの脳天に炸裂した。

「うつうつ、痛い、酷い、もみじん……」

「正当防衛よ」

「いーや違うね。苛めだね。バイオレンスだね。と、ゆうわけで慰
謝料を要求します！」

「数学の課題は見せないわよ」

ちよっとした意地悪。先の先で言葉の刃を突き刺した。

「ひ、何故それを……？」

まあ、知っていたしね。私のノート目当てのことは、昨日、ゆっこ
から直接聞いたんだし。

本人は覚えていないでしょうけれども。

「そ、そんな。おねげしますだ。お代官様あ」

「はいはい、わかったから泣かないの」

そうして、私はあらかじめ用意していたノートをゆっここに渡すのだ。

ああ、最初から最後までなんて予定調和な朝の風景。

加虐愉悦（隠）

「嫌だ、何これ……」

教室に声が響く。朝の早い時間、教室に居る生徒達はまだ数が少ない。

声をした方を見ると、一人の女子生徒が口を押さえて佇んでいる。ワンレンの長髪、気の強そうな瞳が苦渋に歪んでいる。

「どうしたの？ マーサ」

私の数学のノートを写していたゆっこが、女子生徒に声をかける。その時私は、別の方向を見ていた。最前列で彼女の声に反応すると無く、本読んでいる男子生徒を。

「あー、ゆっこ。これを見てよ」

マーサと呼ばれた女子生徒が指差した方向には大きな水槽がある。

水槽の中にはノ赤いノ金魚がノプカプカノお腹をノ天井にノ

「うお、なんだこりや。もみじんきてきて、ひでーよこれ」

ゆっこは水槽を見たまま、手だけでこっち来い来いしている。

こっそりと溜息。正直、実行に移すのは五分五分と思っていたのになあ。

「原因は何なんだろう？ 紅葉ちゃんわかる？」

金魚の死体に近づきたくないのか、マーサは一步離れてゆっこの肩越しから水槽を見ていた。

「サーモスタットが故障して水温が上がったとかは、よく聞く原因だけど……」

本当の原因は知っているのだが、私That原因を知っている訳は説明困難だったりする。

とりあえず、無難な回答を述べてみる。

「むむむ！ ボス！ この水槽の水から変な匂いが……。うおう！ 鼻がツーンとしたあ！」

……さすがは野生児ゆっこ。ほしくも無い正解を体を張って拾い上げてしまった。

ちらりと周りを見ると、騒ぎを聞きつけた他の生徒が野次馬ヨロシク周りを囲んでいた。

人だかりの中に彼の顔は見られない。

それこそ良く耳にする『放火犯は火事の現場に戻ってくる法則』は彼には適用しないらしい。

「あ、本当だ。この水変な匂いがする……？ この匂いは洗剤……？」

好奇心に負けたのか、マーサが恐る恐る水槽に顔を近づけて匂いをかぐ。

「なあに！ それじゃ、誰かがこの水槽に洗剤を入れたっての？ ひでーことすんなあ！」

正しくは塩素系の漂白剤のはず。

きつとこの金魚たちは塩素で呼吸器系の細胞を破壊されて、苦しみながら死んでしまったのだろう。

「えー、じゃあなに。誰かが意図的にやったってこと？」

「つーか、犯人誰よ？」

「昨日の放課後は金魚生きていたよね」

「うちのクラスに犯人いるとは限らないじゃん」

周りの野次馬達が一斉に騒ぎ立てる。ちょっとした事件は退屈な日常を少し刺激を与えるらしい。

どこか緊張感の欠けた野次馬の裂け目から、最前列の席に座る彼が見えた。

彼の周りには誰もいない。

誰も彼を見ていない。

さっきまで読んでいた本は閉じられている。

こちらを振り向くかたちで、彼は騒ぎを見物していた。

確かに見た。

こちらを観察するような彼の表情が一瞬、三日月のような陰惨な笑みを浮かべたのを。

虚面世界（接続開始）

「いやだわ。そんなことがあったの」

晩御飯のハンバーグを食べながら、お母さんは眉を顰めた。

あらら、そんなに真っ正直に反応されるとは思わなかったな。

せつかく落ち着いて食事していたのに、

「今日は学校でどんなことがあったの？」

なんて、食事中に思い出さたくないことを思い出させてくれたから、お礼に、私と同じ気持ちになってもらおうと今日の朝、学校であった事件を事細かに説明したのだ。

てつきり、

「食事中にやめてよ、そんな話」

と、逆切れ（そっちから聞いたという意味で）されると思ったのに。

「それで？ 犯人は見つかったの？」

ふむ、うちのお母さんもなかなかの野次馬根性らしい。

事件の陰湿的な部分は意図的に無視して、よりセンシヨーナルな謎解きに目を向けていらつしやる。

…… あーあ、わかっていてもちよつとショック。

自分の生みの親が一山いくらの俗物なんてねー。

まあ、うちの親に限ったことではないか。

子供、大人、老人、男、女、良い子、悪い子、普通の子。

みんな、みーんな、道德というの仮面の下は似たりよつたりで怖ましい。

誰にも、自分でも見えない部分だから、気付けないだけで。

「いや、見つかっていないよ。ホームルームで三月先生が来てすぐに場を収めたし」

そのあとすぐ、三月先生は水槽ごと金魚を処分していた。
ちなみに、学級委員として私は手伝ったけど。

基本的に良い子にカテゴライズされているので文句は言わない。

……あの時、金魚を埋める時、いやに三月先生は悲しげだったな。あの金魚、近所のお祭りでは三月先生が取ってきたものだったけ？そういうええ。

確か、生き物の世話を通してクラスの中に連帯感と責任感が生まれることを狙っていたはず。

楚々とした外見に合わず、かなり熱血思考の持ち主である。

初めてクラスの担任になった三月先生はそんなちょっと夢見る乙女だった。

「いやだわ。犯人捕まっていないの？ 学校がちゃんとしてもらわないと心配だわ」

おっと。少し意識を飛ばしていた。が、そんな私にかまうことなく、

お母さんは犯人を特定していない学校に対して、憤っていらつしやる。

基本的に自己完結の人なのだ。周りのことを気にせずに、自分の見たいものが見れる才能。

（ある意味うらやましいわ。その鈍さ）

少し、食欲が無くなったのがわかる。ご飯をおかわりしようと思っていたが止める事にする。

「大体危ないじゃない。クラスの中の誰が犯人かわからないのでしよう？」

やれやれ、ドラマの見すぎだ。

「お母さん。別にクラスの中に犯人がいると決まったわけじゃないんだよ？」

「あら、そうなの？」

「うん。昨日の放課後まで金魚は生きていることは確認されているの」

「誰に？」

「同じクラスの子」

「じゃあ、そのこが犯人じゃないの？」

「いや、そのこは部活仲間数人と行動していたみたいだし」

それにアレですよ、お母さん。そんなむやみやたらに同じクラスメイトを私に疑えというの？

「じゃあ、犯人はその後教室に忍び込んで事に及んだってこと？」

「恐らくね。だから、犯人はクラスメイトに限定されないんだよ。最悪、外部の人って可能性もあるし」

実際、うちの中学校は建物は古く、警備も万全ではないそうだし、愉快犯ヨロシク地元のOB、OGが学校に侵入してくることもザラらしい。

もちろん諸先輩方が悪事を働くことはほとんど無い。純粹に懐かしくて、昔話のついでに立ち寄るらしい。

「なーに。外部の人間なら最悪じゃない！」

お母さんはどうあっても、事件性を大きく膨らみたいようだ。

正直、付き合ってらんない。

「ご馳走様」

「あら、もう終わり？」

「うん。課題があるし、自分の部屋に行ってる」

問題は、真実、犯人はクラスメイトで、どうやらまだ満足していない様だということ。

~~~~~

お風呂上りの濡れた髪をドライヤーで乾かす。腰まで届く黒い髪はちょっとした私の自慢。

夜よりもなお深い艶のある漆黒は私の心を表現している一部だと思う。

枝毛なんて作らないよう、毎夜丁寧にお手入れしているのだ。

髪が完全に乾いたのを確認して、ベッドに向かう。

机の上には明日の学校の準備が完了済み。課題も予習も全てOK。  
水色の寝巻き姿で布団の中に滑り込む。

そうして私は眠りに落ちる。

そうして私は眠りに落ちたのを実感し、目を開ける。

おはよう。クソツタレの世界の始まり始まり。

## 虚面世界（探索）

目を開ける。私が目を開けることで、この世界は輪郭を形作る。薄い靄がかかったよう。何もかも曖昧で、もう、目を凝らすことさえ諦めてしまった。

布団から身を起こした。既に私は学校の制服を着ている。立ち上がり、体を伸ばす。疲れもコリも無いけどなんとなく、ふと机の上に目をやると、あるはずの学校の鞆が無くなっており、いつの間にか私の右手に収まっていた。

なんとなくいつもの習慣で姿見で全体をチェック。うん、大丈夫。もともと、見栄っ張りの私がこの世界でだらしない格好を他人に見せることはないだろう。

「それじゃあ、学校に行きますか」

私は腹に力を入れて、自室のドアを押した。

ガラガラ。教室の引き戸がスライドする。登校時間は驚きの零秒。自室を出るとそこは教室だった。みたいな？

現実になんな部屋に住んでいたら、発狂ものだけだね。

うん？どうやら就寝時間が早すぎたらしい。教室には誰もいなかった。

中学に入ってから、みんなの就寝時間が遅くなっているようだ。今日もみんなは現実時間にご満悦なのかしら？

「ふおおお！ ねっけーっ！ 根性うううう！」

いや……どうやら一人先客がいるようだ。やはり健康優良児。睡眠時間もたっぷりとのだろう。

声が聞こえてくるのはいつものようにグラウンド。

そこが彼女のテリトリ、もとい一番思い入れのある場所なのだろう。

窓際に寄り添って、そっと覗き込む。そこには果たしてゆっこがいた。

うわあ。タイヤ引いている。それも二十個近く。汗だくになりながら一歩一歩ゆっくり走ろうとしている。

きっと、アレがゆっこ本人が本心からやりたいことなんだ……。だとすればゆっこは極Mなのか？ うーんと、いやな結論になりそうなので思考放棄。

まあ、ゆっこは数少ない友達だし生暖かく見守ろう。

だって、ゆっこはこの世界でも現実世界でもほとんど齟齬が生じない稀有なお人。

いや、正確に言えば、この世界においては現実世界の斜め上に行く面白ウーマン。

つまり、私の目的からいえば、何の役にも立たない愛すべき友人なのだ。

しばらくゆっこを見て和んでいると、ガラガラと音をたてて誰かが教室に入ってきた。

入り口に目をやる。そこには同じクラスの八千代ちゃんが立っていた。

背の低い幼い顔立ち。大きいお人形のような目。色素の薄い赤みがかった髪。舌足らずの声。

その容姿を持つて、男女問わず大勢のクラスメイトに可愛がられている、現実世界では。

「あー、だりい。つーか、明日学校火事になんねえかなあー」

開口一番物騒な台詞を吐いて八千代ちゃんは机に足を乗せてだらしなく座った。

ちなみに、彼女が足を乗せている机は、彼女に下僕のようにつき従う男子生徒のものだ。

「お、紅葉ちゃんじゃん？」

普段は絶対しないような険のある目。

「なーなー、委員長。宿題見せてくれよう」

「別にいいよ。古典でいい？」

「お、やりい！ 悪いねー紅葉ちゃん」

まったく悪いと思っっている様子ではない。が、これでいい。

この世界で与えた悪印象は、確実に現実世界にも影響するのだから「なーなー、もみじちゃん。今日の金魚の事件さー。私、灯奈多の奴だと思っんだよねー」

「え、そうなの？」

実際は違う。私はこの世界で実際に水槽に洗剤をぶちまけている奴の姿を確認している。

「だって、あいつム力つくじゃん」

まったく理由になっていない。が、この世界においてはしょうがない。

この世界では論理的思考など取っ払い、みんながみんな本心を優先させるのだ。そう、私以外は。

ちなみに、八千代ちゃんと灯奈多ちゃんは現実世界ではお友達だったりする。

八千代ちゃんは灯奈多ちゃんを本心では嫌っており。

灯奈多ちゃんは八千代ちゃんを本心から大好きだったりする。

八千代ちゃんの愚痴に付き合っていると、もういい時間なのか、クラスに人が増えてきた。

「あいつ死なないかなあー」

「学校来たくない……」

「明日こそ退部届けを出そう」

「沖君かつこいいい！」

「そろそろあいつと別よう」

「来栖さん、写真を取らせて？」

「ふあいとおおおおオオウ！！！」

みんな、みんな、好き勝手に本心をさらけ出す。

こつちからあわせない限り、会話のキャッチボールは成立しない。だけど、私にとっては絶好の情報収集の場だ。

クラスの人間関係、利害関係が浮き彫りとなる。

そして、私はこのクラスの人間関係に干渉する技術がある。

そうして私はクラスで有利な立ち位置を獲得してきた。

クラスに起こる波風を事前に回避してきたのだ。

……しかし、今日の観察対象である彼がいない。

前後左右首を回して彼の姿を捜す。どこにもいない。まだ寝ていないのだろうか？

ふと、視界の隅にいやなものが映った。窓の向こう、校庭の隅に歩く人影。

右手にラジオペンチ、左手にニッパー。

あくまで静かに、整然と飼育小屋に向かう彼の姿がそこにあった。

## 虚面世界（赤口）

思い思い好き勝手に、相手のことを考えず、自身の深層をさらけ出している級友達の脇をすり抜けて教室のドアに向かう。

ドアの前でいったん停止。深呼吸をし、前を睨むように見据え、教室の引き戸を引いた。

視界の開けた風景に一瞬混乱する。観音開きのドアを開くと、目の前に体育館に続く下り階段があった。周りを見渡して、自分がいる場所を確認する。ここは4階建ての北校舎と、体育館をつなぐ連絡通路だ。一応外に出ているので、上履きは外靴のローファーに変わっている。しかし目指す目的地、飼育小屋は校庭をはさむかたちで向こう側に存在し、ここからかなり歩かなければならない。

本来、最短距離で飼育小屋に向かうには、北校舎の反対側にある、登校用の玄関口から出ればよい。実際、私はそのつもりで教室から出たのだ。

しかし、結果として、私は飼育小屋を避けるようにこの場所に出てしまった。

躊躇しているのだろうか？

躊躇しているのだろう。

右手にラジオペンチ、左手にニッパーを携えた彼が飼育小屋で行うであろう行為を私は簡単に想像できてしまう。それこそ吐き気をもよおすほどに。

なぜなら私は目撃しているからだ。昨日、この世界で。

ニマニマと、普段無表情を崩さない彼がニマニマと薄く笑いながら、手にした塩素系漂白剤をダバダバと水槽に注ぎ込んでいるのを白濁してゆく水槽。一つ、また一つと水面に浮かんでくる赤い金魚。そんな金魚たちを愛しそうに眺め、彼は

「はは」

と、小さく囁く様に笑っていた。

不意なフラッシュバック。突如沸き起こった昨日の悪夢が、背中に悪寒を駆け巡らした。両手で肩を抱くようにして呼吸を整える。数瞬の休憩。寒気を熱気で駆逐し、私は歩き出した。

校庭を横断して、飼育小屋を目指す。私の中の躊躇と負けん気が、歩く速度はあくまで一定にする。ここからでは飼育小屋の中は暗くてよく見えない。まるで深い洞のようだ。私は飼育小屋で目にするであろう惨状に覚悟を決める。

その時、何を目にするでも無くまず始めに、私の耳に聴きなれない音が響いてきた。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

一定のリズムで、音が響く。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

聞きなれない音であっても、これが何の音であるかは私は容易にわかってしまった。ここに向かう彼が両手に携えていたもの。右手にラジオペンチ、左手にニツパー。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

この音を、遠くない昔に私は聞いたことがある。

小学5年生の夏休み。近所で催された夏祭り。私は射的ゲームで、なんだか知らないがプラモデルをゲットしたのだ。赤と黒のメタリックカラーのスポーツカー。本当は隣においてあったブランド物の香水（今考えれば、明らかにバツタ物）を狙っていたのだが。

それでも、せっかくだからと、その頃はまだ家にいたお父さんに工具を借りて、自分で組み立てたのだ。その時、ニツパーでゲートとパーツを切り離す時の音が確かこんな……。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

暗い飼育小屋で音が響く。

確かなのは、あの時私は組み立てるために解体したのであって。



パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。  
音が重なることに、飼育小屋が暗くなっていく。

彼は、解体することを目的としている。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

音にあわせて赤い液体が飛び散る。

こぼれる赤い液体が土の地面で黒いシミとなっていく。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

因幡の白兎じゃあるまいし、既にウサギの体に白い箇所など見当たらない。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

わかつている。わかつているはずだ。この世界には人間しかない。だから、あの、キーキーと震えながら鳴くウサギも、彼の本心を体现するための舞台装置にしかすぎない。彼が、この行動を取ると決めた時に、必要の応じてこの世界に現れたのだ。だから。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

一定のリズムが耳に障る。こちらに背を向けた彼の表情はわからない。きつと薄く笑っているのだろう。

パチン。パチン。パチン。パチン。パチン。

おもむろに彼が立ち上がり、四肢が裁断され、両目を潰されたウサギの半分になった耳を掴んだ。そして、奥の壁に向かって振りかぶるように。

『ゴシャ』

そして、私は目を覚ました。荒い息を整えながら、枕もとの時計を確認する。

AM 4:30

今日はもう眠りたくない。火照り、汗ばんだ体が非常に不快だった。シャワーを浴びるために、布団から起き上がる。

「ん」

下唇に違和感。ずっと噛み締めていたらしい。鉄臭い血の味が口内に広がっていく。

小指で唇を撫でるように丁寧にぬぐう。赤く染まった小指。タラリと血のスジが手の甲を伝ってゆく。

私は、自然と目が細まってゆくのを実感していた。

## 無貌装飾

「おはよう。須川君」

こんな早朝に、誰かに声をかけられるなんて予想だにしていなかったのだろう。能面の様な彼の表情が崩れる。ただし、ほんの一瞬だ。少し眉尻を上げ、軽く息を吸うように口を開けた彼の表情は、私が目を瞬かせた瞬間、画面が切り替わるようにもとの無表情に戻っていた。

「お、おはよう。委員長」

彼は恐る恐るといった感じに挨拶を返してくる。人と話すことを慣れていないのか、無表情の彼の目は私を避けるように、左へ右へせわしなく動いている。

あえて私は、彼の行く先を遮るように目の前に立つ。場所は北校舎の正面玄関口。私の後ろ、約二十五メートル先には、飼育小屋で、今日ものんきにウサギ達が惰眠をむさぼっている。

「けど、びつくりしちゃった。朝早いんだね。須川君は」

ただいまの時間、午前七時をちよつとすぎたところ。昨日から実力テストの勉強期間のため、部活の活動は禁止されているので、朝練に興じる生徒達はいない。この時間に学校内にいる先生もせいぜい二、三人といったところか。つまり、今学校内はほ

とんど無人と言っても過言ではないのだ。

「い、いや、僕は別に……。そ、それを言うなら委員長だって、は、はいよ」

彼の声音に、非難めいた色が混じる。

「うん。たまたま今日は早く目が覚めちゃって。せつかくだから早く登校してみたの」

本当は、眠れなかったただけなのだが。二日連続で寝不足は正直きついです。体力的にも、精神的にも、お肌的にも。

「……そうなんだ」

無表情の彼。感情を表に出す庫を極端に、嫌う、いや、恐れている彼。

しかし、それでも彼の憤りを肌で感じた気がした。  
パチン。

耳の奥で嫌な音が響く。

「それで、須川君は？」

「え、……え？」

「いつもこんな朝早く登校しているの？」

「……ああ、いや……僕も委員長と一緒にだよ？ たまたま朝早く起きたから……」

「そうなんだー。朝早いつて意外と気持ちいいよね。空気も美味しいし。なんか平和な気分」

実際朝早いせいか、住宅街の人々の気配がどこか希薄だった。目に映る町並みが、写真を切り抜いた一部のように現実感が無い。チユンチユンと鳴くスズメの囀りと、自身の靴音だけが耳に響く。変化を嫌い、停滞した世界で私は一人ぼっちで、大きな安堵感に包まれていたのだ。

「そ、そうだね」

彼の目線がソワソワと、会話を切り上げるタイミングを捜しているように見える。

「じゃあ、須川君は今から散歩に出かけるのかな？」

「え……。なんで？」

「いや、だって玄関口から外靴はいて出てくるんだもん」

「……ああ、うん。ちょっとその辺歩こうと思って。い、いい天気だし」

「ふーん？ んん？ それじゃあなんでそれ持っているの？」

そう言っただけで私は彼の右手を指差した。彼の右手が握っているのは学校指定の学生靴。会話を始めた当初、私から距離を置くように彼は左手から右手に持ち替えたのだ。まだ新しい学生靴は、朝日を反射して、一際私の視界で自己主張している。

その鞆の中にはきつと、これから使う予定だった解体道具が入っているのだろう。

「一回教室にいったんでしょ？ 置いてくればいいじゃん」

慌てるかな？ と考えていた。今までの彼の会話の対応から、私はそう考えていたのだ。

しかし、彼は慌てることは無かった。

一瞬下に向けた顔を、再び上げた彼の表情を見て私の体温は急速に下がった。動揺が顔に出ないように心中で押し殺す。

彼の顔は、さっきまでの『無表情』とは質が違う、もっと性質の悪い物になっていた。

俗に言う『能面のような表情』ではなお足りない。

彼の表情には生気が足りない。いや、生物であることを証明する表現を放棄している。

彼我の距離は、彼方でもまだ近い。

温かみも、弾力も感じさせない彼の口が機械的に動く。

「いや、忘れ物をしちゃってさ。いったん家に帰って取ってこようと思うんだ。この時間ならまだ十分に間に合うしね。『早起きは三文の得』ってこんなことを言うのかな？ 忘れ物をした時点で違う気がするけどね」

抑揚の感じさせない彼の口調。私の耳に単語の羅列が強制的に浸透してくる。

「そ、そうなんだ。よかったじゃん。早く気付いて」

「うん。委員長はこれからどうするの？」

「……せっかくだからちよっと校内を散歩するつもり」

「そう、それじゃ」

そう言って、彼は正門に向かって歩き始めた。

その後姿に言い知れぬ恐怖感を感じてしまう。全然安心できない。彼が校門をぬけて私の視界から姿を消しても、未だ安心できない。

結局、私はチャイムがなるまで、飼育小屋が見える

位置から離れられなかった。

## 平穩回歸（偽）

「あー、紅葉ちゃん発見ー。今日は登校して来るの遅くないー？」朝の挨拶も忘れ、遅刻ぎりぎりで教室に入ってきた私はいきなり声をかけられた。舌足らずの甘えるような声。今私は余裕が無いのだろう。いつもは何も感じないその幼げな声に心がささくれだつ。が、努めて笑顔で声のしたほうを向いた。

「おはよう。八千代ちゃん。ちよつと校内を散歩していたら遅刻しそうになっちゃった」

私に声をかけてきたのは、わがクラスのアイドル見草八千代。まるでよく出来たフランス人形のように、自分の席にちよこんと行儀よく座り、少し首をかしげながら私を見つめていた。大きなビー玉の様な目は、自身の存在が無垢であるという認識を、周りに強制させているようだ。彼女の周りには、数人のクラスメートたちがまるで護衛のように囲んでいた。

「あー。席に鞆があるのになんで教室いないのかなあーって思ってたんだ。今は部活も休みだし？　だよねえ？　燈火君？」

そういつて彼女が声をかけたのは周りにいるクラスメート達ではなく、ちよつと離れた席で何をするでも無く、大欠伸をしていた男子生徒だった。彼はゆっくりと緩慢な動作で八千代ちゃんの方を向く。

「んー？　ん、ん、ん。そだよー。今は部活動休みって言うより禁止だからねえ。道場関係はあから鍵がかかっているよー。だから剣道部の来栖委員長は朝錬とかは無理なんじゃないかなあー」

燈火君は至極どうでもよさそうに、適当に返事を返す。質問には答えたつもりなのだろう。最早彼は八千代ちゃんの方を見ておらず、その眠たげな視線は教室の黒板あたりを彷徨っていた。

「え、でもー。校庭とかで朝錬とかできるんじゃないの？」

八千代ちゃんは食い下がるように、話題を繋げようとしている。

自身の苛立ちを、その声音に隠しながら。実際、注目されたがりの彼女は、この何事にも無関心で、自意識が希薄な彼の態度が気に入らないのだ。きっと彼女の頭の中では、私がこの時間に教室に入ってきた理由など、欠片も興味が無くなったに違いない。

「いやあ、校庭とかではすぐに先生に見つかるでしょー。そりゃー、ゆっこちゃん見たいなのは例外だけだねー。わずか一ヶ月で先生方はあきらめたもんない」

面倒くさいのだろう。燈火君は目を閉じ、頬杖をつき、ダルそうに八千代ちゃんに應對している。

「えー、でもでもおー……」

最早私の出番は無さそうだ。私はそつと自分の席に向かった。窓側の席に向かいながら、反対側、教室を俯瞰した場合は対角線を引くように、私は廊下側の一番前の席に向かって目線を引く。

彼は、誰とも話すことなく本を読んでいる。それはいつもの風景。教室の喧騒の中に存在する静かな無風地帯。

彼がずいぶん前に教室にもどってきたのは知っていた。私は、北校舎と中欧棟を結ぶ二階の渡り廊下からそれを見ていたのだ。

だから、あの後私はすぐ教室に向かつて良かったのだ。

ただ、そうしなかった。

いや、出来なかった。

なんだかんだ理由を付けて私は、ずるずるとこの時間まで、何も起きないであろう飼育小屋を見張っていたのだ。

ふと、彼が何かに気付いたように、本を読むのをやめ、顔を上げた。そして、後ろを振り返るような仕草。私は慌てて視線を逸らす。窓の向こう、誰もいないはずのグラウンドで、

「ファイトオオオオオオオオ……オウ……オオオウウウ……」

大量のタイヤと自身の体をロープで結びつけたゆっこが、一歩も動けず小さく呻いていた。

……さすが有言実行できるいい女だ。うん、ちょっと癒された。



## 放課後（再燃）

真つ赤に染まった教室には、私を含めた四人の生徒が残っていた。さかのぼること一時間前、帰りのホームルームで担任の三月先生は「来栖さんと、沖君はちょっと残ってもらえないかな？　お願いしたい仕事があるの」

と、自分のクラスの委員長、副委員長に一ヶ月ほど先にあるイベント、林間学校の資料まとめにかり出したのだ。

夕日が一番紅く映える時間帯。教室全体は、幻想的な夕日と長く延びる影の赤と黒のグラデーションで色付けされている。濃い色の絵の具で塗りつぶした様な世界は、風景も人も輪郭が曖昧で落ち着かない気持ちにさせたいた。

「しつつかし、三月ちゃんも鬼だよなー。せつかく部活が休みの放課後に仕事を言い渡さなくていいじゃん？　そう思わない？」

私の前の席で向かい合うように座っている副委員長の沖君が、うんざりしたように言った。彼の手には、四十枚ほどのプリントの束がある。この一束は、後日配られる林間学校の資料一人分である。私達の仕事は、クラスの生徒の人数分の資料を一部一部、落丁がないのかチェックするのだ。ちなみに委員長である私は、量が倍ほどある別の資料を同じようにチェックしている。

「文句言ってないでさっさと終わらそー？　あと少しじゃん？」

手元の作業のペースを落とすことなく、私はぞんざいに沖君に返事をした。

「うっ、相変わらず紅葉さんはドライ&クールビューティーだ……。けどさあ、本来この部活休みてテスト勉強のためだろ？　それなのに課後に仕事させるなんて本末転倒じゃねえ？」

沖君はそう言いながら、作業を再開している。不満があるようだけれども根が真面目な彼は、一枚一枚几帳面にプリントのページ番号をチェックしていた。

「それは信頼されているからだねえ。孝道も来栖委員長もこんな程度では成績を落とすことなんてないと思われてるんだよ」

沖君の横でのんびりとした声で燈火君は言った。ゆったりとした動作で沖君がチェックしたプリントの束をホッチキスで綴じている。

何故、燈火君がここにいるのかというと、三月先生から仕事を言い渡された沖君が

「燈火。一緒に帰ろうぜ！ だから仕事手伝って！」  
と、言ったところ、

「うん。いいよ」

と、わずかな逡巡もすることも無く、条件反射の域で燈火君は返事をしたのだ。

「そうなのかなあ？ でもさあ、実際勉強できる時間が減っているわけだなあ……」

「あはは、そんな発言を出来る時点で沖君は信頼されるに値するんだなあ、これが。実際の話し、このテスト休暇で放課後から真面目に勉強する生徒なんてほとんどいないと思うよー？」

「むう……。みんなそんなもんなのか？ 紅葉さんもそうなの？」

「うーん……。教科書の復習ぐらいはするかもしれないけどね。実際、実力テストって範囲とかあつてない様なものらしいし」

「あー、考えてみればそうだな。どこまで勉強していいか見当がつかないや」

「そうそう、だからここで仕事しようが、放課後遊ぼうが、みんな一緒なのかもねえ」

のんびり、鼻歌でも歌いだしそんな雰囲気の燈火君。けれど実際、彼もかなりアタマがきれる。全てのことに無頓着であろうとする彼は、自分のことでさえそうであるため、自身の能力を発揮する機会がないのだ。ちなみにリーダー気質である沖君とは長年の親友らしい。まったく正反対の二人が何故？ とクラスのみんなは首をかし

げている。

「なるほどね。それじゃあ、ちなみにゆっこは？ どのくらい勉強するの？」

私は、隣の机で一心不乱で私がチェックしたプリントを綴じているゆっこに声をかけた。

「勉強？ するわけねー！ そんな時間があるなら私は駆け出すね！ あの夕日に向かって！」

予想通りの答え。ゆっこ以外の私達三人は声をたてて笑う。

ちなみにゆっこがここにいるのは、放課後の仕事に向けて準備している私に近づいてきて、

「ふふふふ、もみじん。手伝ってやるぜ！ これで今日の歴史の課題の貸し借りはなしだぜ！ つーかむしろ敬え！ このゆっこさまを！」

と、調子に乗った発言をしてきたので、

「そう。それじゃ、これからは自力で課題がんばってね」

と、にっこり笑顔で恫喝したら、

「手伝わせていただきます！ もみじん！ 今後ともヨロシク！」  
といった流れで私の軍門に下ったのだ。

「ちょ、なんでみんな笑うんだよー。いいじゃん。夕日に向かって走るって青春の王道よ？」

「うーん。どうだろうねえ」

「いやあ、それはさすがにないだろ」

「センスが昭和ね」

「ムキー！！！」

穏やかな放課後。ゆったりと流れる時間。その後も私達は作業を進めながら、プリントに書いてあった林間学校の自由時間の少なさに文句を言ったり、お互いの部活の近況を話し合ったりした。

「うん、これで終わりだねえ」

燈火君が最後のプリントをチェックし終わる。

「やれやれ、やっと終わったか」

沖君が固まった体をほぐすように、伸びをしている。

「うんにゃ？ このプリントどうすんのさ？」

「ああ、職員室の三月先生の机の上に置いとけばいいみたい」

「そうか、じゃあ後は俺達が運んどくよ。燈火半分持ってくれ」

「そう？ それじゃあ、お願いしようかな」

「よっしゃ、もみじん！ 帰りどつかよって帰ろうぜー」

「おいおい、仮にもクラス委員の前でその発言はどうなんだ？ ……」

…おい燈火、このプリント……燈火？」

沖君の口調に不吉な色が混じる。燈火君を見ると、彼は呆然した表情をしていた。

「おい、どうした？ 燈火？」

「……燃えている」

燈火君の視線は私達を追い越し、窓の外に向かっていった。

そこは、その方向にあるのは。

「飼育小屋が燃えている……」

炎の色で真っ赤に染まった教室。クラクラゆれる赤と黒のグラデーション。

## 赤い世界

予定よりも幾分遅い時間に校門をでる。

さつきまで辺りを賑わしていた野次馬達はもういない。パトカーや消防車が引き上げるのと同時に、波がひいて行く様にいなくなった。それでも大勢の人の熱気の残滓か、あたりに漂う空気が生暖かい。好奇心と他人事が内包した空気はどこか湿気を含んでいるようで、無遠慮に体にまとわりついてくる。

先ほどまで赤く世界を染めていた空は、今は黄昏の紫色。夕闇と夜の狭間で、白い月と幾つかの星々が所在無さに瞬いている。

錯覚だとは解っているのだが、深く息をすると煙の匂いを感じ取りそう、私は浅い呼吸を繰り返しながら歩いていた。自然、言葉を発さなくなる。周りの三人はどうなのだろう？ 今のところ誰も彼もが口をつくんでいる。

教室から飼育小屋が燃えているのを発見した時、一番早く行動に出たのがゆつこだった。

火事を確認するや否や、彼女は教室を飛び出し、真っ直ぐに現場に直行したのだ。そして一番近くにあった消火栓に近づき水を出そうと試みるが、慌てていたのか結局水を出すことは出来ず、怒りに任せて消火栓を蹴った後、少し離れた水飲み場に直行した。

その頃には、私達三人も動き出していた。まずはじめに私が

「とりあえず、消防署に電話するね」

と言って携帯電話を取り出して電話をかけ始める。

次に燈火君が

「じゃあ、僕は職員室に行って先生に知らせてくるよ。まあ、あれだけ派手に燃えているからね、もう気付いているかもしてないけど」  
「そういいながら、とことこ教室を出て行った。」

最後に、ちよつと乗り遅れた感じの沖君が

「じゃあ俺は……、星明のところに行ってくる。この状況、あいつは無茶しかねん」

と言って、不機嫌そうに教室の出口に向かう。私が同意の意味で苦笑を返すと、沖君は苦笑いをしながら駆け出していった。

窓の外は深紅に染まった世界がユラユラと揺れていた。

消防署に電話を終えた私は、バケツを持って飼育小屋に駆け行って、くゆっこを見つけた。両手に持ったバケツにはなみなみと水がはっている。だけど、その水の量ではあの火を消すことは出来ないだろう。それはきと、くっこにも解っていることなのだ。それでも、くっこは止まらない。……止まらない。目の前に攻略不可能な『現実』があってもあきらめることを良しとしない。たとえ無駄と解ついても挑戦する。いや、無駄と考えることを放棄している。そんな彼女を私は、非効率的だと嘆息しながらも、目を逸らすことは出来ないのだ。その時私の心を支配する感情は、諦念か憧憬かは解らないけれども。

お、くっここの後ろを追いかけないように沖君が走っていく。大声でくっこに声をかけながら。けれどもくっこは止まらない。その目は真っ直ぐ前を、燃え盛る飼育小屋を見ている。沖君一人じゃちよつと重荷だ。私も現場に向かう。

走って下駄箱に向かう途中、燈火君と三月先生と合流した。

「やあ、委員長。とりあえず三月先生がいたんでご同行願ったよ。消防署の方はどうだい？」

「私よりも前に、近所の人から通報があったみたい。もう少ししたらつくみたいよ」

「まあ、あれだけ派手に燃えていたからね」

「……ところで来栖さん。星明さんが現場に飛び出していったって本当？」

「あ、はい。でも沖君が無茶しないようについていきます」

「そう、大丈夫かしら……」

「とりあえず現場に向かいましょう。先生」

玄関口から出た私達三人が最初に目にした光景はある意味で信じられないものだった。

ゆつこの右足が高く上がる。日々の部活&自主練で鍛え上げられた彼女の足は、健康的に細くしなやかだ。

右足とは逆に、しっかりと地を踏みしめている左足の親指を軸に、彼女の体は螺旋の軌道を描いていく。

背中に一本の鉄杭を打ち込んでいるよう。

左手側に壁ある様に右半身をたたむ動作は、エネルギーの方向性を限定させる。

左足の親指から発生した運動エネルギーは螺旋を描きながら上半身に伝わっていき、腰の旋回運動で右足に収束していく。

そのエネルギーの塊となったゆつこの右足のつま先が、沖君の顎を打ち抜いた。

時間の進み方が驚愕により歪んでいく。コマ送りのようにゆつくりと沖君は地に伏した。

意味が解らない。いったい何がどうなったらゆつこが沖君にハイキックを決める展開になるのだろうか？ 混乱する頭でゆつこを見る。大きな違和感と嫌な予感。ゆつこの体はずぶ濡れで、彼女のサイドポニーの毛先からポタポタと雫がたれている。地面を見ると、空のバケツが二つ転がっている。

「ゆつこ！ ちょっとまって！」

私が叫ぶと同時にゆつこは燃え盛る飼育小屋に駆け込んだ。

隣で三月先生が悲鳴を上げているようだ。だけど私には何も聞こえない。

音が消失した世界で私は無我夢中で駆けていく。

## 赤い世界？

燃え盛る飼育小屋はその真っ赤な色彩と、肺を焦がすような熱風で私の足を止まらせた。

進入禁止。

真っ赤の炎はまさに赤信号。その熱と、炎に対する原初の恐怖で私達人間に警告する。

炎に照らされた私の肌が焦げていくような錯覚に陥る。肺に入ってくる空気の熱量が大きすぎて、呼吸が苦しい。なにより、前が見えない。飼育小屋の入り口から濛々と立ち上る黒煙は、中の惨状を覆い隠している。それに、煙が沁みて目を開けていられない。

「ゆっこお！」

中に向かつて必死に声を張り上げる。熱い空気を一気に吸ってしまい盛大に咽た。

「ゆっこ！ 聞こえているなら返事をして！」

咽てしゃがれた声で必死に呼びかける。煙に刺激された目が涙を流しているのに気付く。

嫌だ、これじゃあ、私が泣いているみたいだ。ふざけるな。私の心が怒りで満ちる。

今ここで泣いてしまったら、まるでゆっこが死んでしまうみたいではないか。何を考えているのだ自分は。悲観なんかしている場合じゃない。

それよりも／なにか／早く／上手い方法を。

思考がぶつ切りになっていくのを自覚する。

いくら私が呼びかけても返事は帰ってこない。パチパチと木造の飼育小屋が爆ぜていく音がドンドン大きくなっていく。肥大していく炎とその熱量が私の焦燥を加速させていく。

不意に、飼育小屋の中から何かが崩れるような音が響いてくる。

私はその音に思わず身を竦めてしまった。耳の奥でその音が何度も



何度も反響する。

嫌な予感がツギツギと、嫌な想像がワラワラと私の中で生まれてくる。

だけど、いつまでもここで立ち尽くすわけには行かない。私は頭の中の絶望を強引に押さえつけ、目の前を見据える。この炎と煙の中に飛び込んでいったゆつこを連れ戻さなくては。

なにか、なにかないだろうか？ このままじゃ私は飼育小屋の中には入れない。私は必死になって頭を働かせ、先ほどのゆつこを思い出す。濡れた髪、たつぷりと水を含んだ彼女の制服、そして彼女の目は怒りに滲んでいた。恐らく、彼女はこの火の中に飛び込むために頭から水を被ったに違いない。

彼女はここに駆けつける時、バケツを両手に持っていた。地面に目を向けると炎に照らされたバケツが二つと、その脇にうつぶせている沖君が一人。バケツの方は当然のように空だ。

水、水が必要だ。私もゆつこと同じように水を被ればこの中に入っていける。ゆつこを連れ戻せる。たった一つのみならずにも頭の悪い回答だったが、私はこれしかないと半ば強引に決めてかかった。何より惑う時間が惜しい。こうしている間にもゆつこが。

近くの消火栓。……だめだ、先にゆつこがあきらめていた。時間をかければ水を出せるかもしれないが、今はその時間だって惜しいのだ。

ゆつこが水を汲んだと思われる水道。……こつちもだめだ、遠すぎる。主観でおよそ二十五メートル。学校のプールの片道の距離は、今の私にとっては絶望的な距離だ。

なにか、なにかないの？ 焦燥。混乱。絶望。いろんな感情が私の中を駆け巡る。刺すような煙のせいで目は痛みを通り越して熱かった。涙がとめどなく溢れてくる。膝をつきたい衝動に駆られる。

「委員長。下がって」

荒れ狂う熱気の中、彼の声だけが熱を伴わない。まるで別の世界にいるように淡々とした口調。

隣を見ると声の主の燈火君が私に並ぶように立っていた。炎に照らされて、彼の輪郭が影を伴ってゆれる。怒りに歪むのも無く、絶望に打ちひしがれるのも無く、ただ彼はいつもの様に興味無さそうな表情をしている。

「はじめてだからね。うまく使えるかな？」

そんな、呟くように独り言を言いながら彼は左手を飼育小屋に向けた。その手に黒く細いホースが握られていた。先端にはノズルの様な物がついている。ホース？ 近くに水道があつたのだろうか？ 私はそのホースの続く先を目で追う。ホースの先は彼の右手にあるものに繋がっていた。赤い筒状。誰もが目にしたことのあるもの。彼は消火器を握っていたのだ。

「実は玄関口においてあつたんだよね。みんな慌てていたから気付かなかつたみたいだね」

そついう彼はまったく慌てること無く、側面に張つてある説明どおりに手順を進めて安全ピンを抜いた。

「見た感じ古いからね。ちゃんと消火できればいいんだけど」

彼がそついつた瞬間、ノズルの先から、黄色い煙が勢いよく噴射された。黄色い煙が切り込むように、黒い煙の世界に割つてはいる叩きつけるように赤い炎を侵略する。そして彼は火が消えていくごとに一歩、また一歩と前に歩き出し、中に向かって声を投げかける。「星明さん。今のうちに出てきてー」

はっ、我に返る。そつだ。私でも想像がつく。確かに今は消火器のおかげで火は弱まっているが、それも長くは続かない。消火器の中身には限りがある。対して、飼育小屋全体まで覆いつくしている炎は膨大だ。とてもじゃないが消火器一本で完全鎮火とはいかないだろう。しかし、今、飼育小屋の入り口を覆っている煙と炎の勢いは弱い。だとすればタイミングはここしかない。ゆつこを連れ戻せるタイミングは。私は大きく息を吸い込んだ。そして、息を止めた

まま飼育小屋の中に駆け込んだ。

「来栖さん！」

どうやら近くに三月先生がいたようだ。悲鳴のような声が私を呼ぶ。だけど振り返らない。厚い煙を掻き分けるように中に進んでいく。熱い。容赦のない熱気が私を包む。焦げ臭い匂いはこの飼育小屋から出ているのか、それとも私自身が焦げているのかはわからない。

「！！」

いきなり、後ろから強烈な圧力。突風のように吹き抜けるそれは黄色い煙を伴って、周囲の黒煙を追い払う。どうやら、燈火君が後ろから消火剤を噴きつけてくれたらしい。たぶんサポートのつもりだろう。ちよつと驚いたけど感謝する。

呼吸は出来ない。煙を吸っては意味がない。だから目の痛みに我慢しながらゆっこを捜す。視界を閉ざそうとする煙を乱暴に振り払う。急がないと、急がないと。

不意に振り回した手に何かが当たった。やわらかい感触。とつさにそれを掴んで煙の中から引きずり出す。それは、俯くように顔を下に向け、両手で何かを抱きしめるように抱えたゆっこだった。

「！！」

私は彼女を引っ張るようにして、出口に向かう。黄色い煙の流れに逆流するかたちで。

ゆっここと二人、燃える飼育小屋から転げ出る。目いっぱい吸い込んだ空気はいまだ熱く、肺が焼けるようだ。

「ゆっこ！ 大丈夫？」

しゃがめる声も氣に出来ない。私がゆっこに振り返る。

「……何なんだよこれ。酷すぎるじゃんかよ……」

彼女は私の言葉なんか聞こえていない。彼女が両手に抱えているもの、小刻みに震える子ウサギ。

「他のウサギはみんなみんな死んじゃってた。このこに折り重なる

ように……」

彼女の顔が苦痛に歪む。彼女自身は怪我はしていないようだ。だけれど実際彼女は痛いのだろう。

「そう……。逃げれなかったのね……」

ゆっこが無事だった事実が私の心に余裕を生ませる。心を平らにして、彼女の痛みを許容する。私の意見はどこにもない。ただ、彼女のテンションに私が合わせる。

「……！ あつたりまえだ！ こんなことされたら……！ くそう、誰だよ……こんな酷いことするのはあ……」

ゆっこのテンションは苦しみや悲しみではない。怒りだ。彼女が怒っているその理由。その事実に関心は私に絶句する。当たりの熱気が一気に冷める錯覚。

彼女が両手で抱いている子ウサギ。その四肢が、何かで潰されたようにまっ平らに変形していた。

## 嘔吐きの帰り道

日が沈みかけ、街灯がポツポツと灯りをともしてゆく。

私達の足元から長い長い四つの影法師が生まれる。音も温度もない、のつぺりと塗りつぶされた無形の人影。一瞬、地に伏した四つの焼死体がその影に重なった。

あれは確か一年前。海を挟んだ隣の国で、大規模な直下型地震が発生した。運の悪いことに、震源はその大国では珍しくない、山間にある未開の村。都市部の華々しい発展とは違い、その村は数十年前の生活様式で暮らしていた。当然、村民の誰もが携帯電話など持つておらず、突然起きた自然の猛威は、村が唯一所持する外との連絡手段である電話線を一瞬で破壊した。さらに隣の村に続く道も、地震による土砂崩れでふさがり、完全にその村は孤立したのだ。更に運の悪いことに、近隣の村民たちもその村のことまで頭が回らなかった。これに関しては、その人達を責めることは出来ないと思ふ。地震の後に発生した大規模な山火事。彼らは迫りくる炎の脅威から逃げるのに精一杯だったのだから。だから、山を降り、避難所で隣村の村民達が誰一人避難してきていないのに気がついてもしようがなかった。この時点で、地震発生から一日と半分が過ぎていた。更に、村民の救助活動が始められたのがその三日後。山火事が完全に鎮火してからのことだった。

炭化した村の跡地。報道カメラマンが撮った生々しい災害の証拠写真。私は近所のコンビニで週刊大衆情報誌でその写真を見た。重なり合う黒こげの人型。最早全体が、余す所無く黒く炭化してボロボロなのに、それが人であったと解ってしまう。小学生だった私は目をつぶると目蓋にその写真が浮かんできてなかなか寝付けなかった覚えがある。

ズンズンと先頭を歩いているゆっこが歩を進めてゆく。うん。わ

かり易く怒っているなあ。無理がある大股なスライド。後ろに続く私達など考えていないのだろう。ヒートアップしたゆっこのメモリーはわかり易く熱暴走中。

あの後、保護したウサギを三月先生に預けるまで、ゆっこは声を出さずに涙を流していた。ウサギがかわいそうだからもあるのだろうが、それ以上に彼女は怒っていた。ウサギに対する理不尽な仕打ちに、理由のない悪意に。だけどその怒りをぶつける対象が彼女にはわからない。だから、彼女が次にとる行動はきつと。

「なあ、もみじん」

唐突に彼女がこちらを向いて、私に声をかけてきた。

「……どうしたの？ ゆっこ？」

「私、この犯人が許せない」

「それは、みんな同じ気持ちだと思うけど？」

「うん。そうだと思う。でも私はそれだけじゃダメなんだ。思っているだけじゃ、我慢できない」

「……」

「だから、私は犯人を探し出す！」

唸るようにゆっこは言い放つ。ああ、やっぱりね。でも、だめ。

その役目は私の。

「だめだ」

急に横から声が飛び出した。感情を押し殺した低く響く声。

横を見ると、痣が出来た顎を撫でながら沖君は発言を続ける。ゆっこを睨みながら。

「星明。おまえでは危険すぎる。やめろ」

遠慮のない沖君の言葉。ちよっと、沖君。その表現はストレートすぎるんじゃない。

「ああ？ あんだよオツキー。私には危険でどういう意味だ？ なに？ 馬鹿にしてんの？ 私を」

頭に血が上っているゆっこはあつという間に先頭モードの突入。「馬鹿にしている……そうかもな。おまえは馬鹿だ。危なっかしす

ぎる」

「なんだてめー……。顎を蹴り抜いたことまだ怒ってんのかよ？」  
いや、普通は怒るでしょ？

「違う！ 俺が言いたいのは……」

「うるせーよ！ 別にオツキーがなんと言おうが私はやるかな！」

「だから聞け！ 星明！」

「うーん。青春だねえ」

緊迫した空気に、冷たい北風。場を読めない台詞が強制的に一時停止ボタンを押す。

周りなどお構いなしに緩みきった表情の燈火くん。右目と比べて虹彩の薄い左目が街灯に照らされて赤く光っている。

「……何を言っているんだ？ 燈火？」

「どーみたら今のが青春になるんだよ。メグリン」

「おやおや？ 実際そう見えるけど？ さっきから沖君。ゆっこさんのこと心配でたまらないって言ってるじゃない？」

「へ……？」

おお、呆氣にとられてゆっこが素の表情に！

「ば、馬鹿野郎！ なに言っているんだ燈火！」

そして沖くんの顔はトマトの見たいになった。

「うんうん。相変わらずのツンデレぶりだねえ。ゆっこさん。彼はこの粗野な外見に似合わず優しい奴だね。彼の気持ちを汲み取ってもらえると嬉しいんだけど？」

「いや、心配してくれるのは嬉しいんだけど……。けど、犯人探しをやめるつもりはない、かな？」

「じゃあ、あれだね。心配で堪らない沖くんは一緒に犯人探しの手伝いをするしかないねえ。あ、僕も手伝うのはやぶさかではないよ？ お邪魔でなければけど？」

「うおい！ 燈火！ 話が変な方向に……」

「いや、手伝ってくれるのは嬉しいけど……」

「だから星明！ 危険だってあれほど……」

「一人でもやるけど」

「く……。わかった！俺も手伝うから。だから決して無理はするな！」

「どうやら僕はお邪魔かな？」

「おまえも来い、燈火！全く何を考えているんだ？変な方向に話を持っていきやがって……」

「なあ、もみじん。私はもみじんにも手伝ってもらえると嬉しいんだけど？」

真っ直ぐ私を見つめるゆっこの瞳。その目線を正面から受け止めて私は、

「そうねえ……。お邪魔じゃなければ、かな？」  
嘘をついた。

「「そんなじゃない！」」

「うんうん、呼吸びつたりだねえ」



## 悪夢

前が見えない。

辺りは真っ暗で、ここがどこだが視覚では確認できなかった。おかしいな。さっきまで教室にいたはずなのに。

自分の両手を見る。不思議なことに、自分の体だけはしっかりと見えていた。淡い燐光を発して、闇の中にぼっかりと浮かんでいる自分のパーツ。

日焼けしていない自分の真っ白い両手。クラスメートの他の男子達に比べても明らかに頼りなく、細く弱々しい。闇の中ではその青白さも極まって、幽霊を連想させる不気味さを帯びている。

一瞬のノイズ。刺すような痛みが頭を穿つ。あまりの痛みで両目を瞑るその刹那、自分の両手が真っ赤に染まっていた。

「っ……」

痛みと驚きで息を止める。真っ赤に濡れた自分の両手。目を閉じていてもその場面がまぶたの裏に張り付いていた。それだけではない。あたり一面に漂う空気の匂いが鉄臭い。両手にヌルヌルとまとわりつく粘性の高い水分の感覚が気持ち悪い。全身の毛がおぞましさに逆立つ。全身からどっと脂汗が吹き出てくる。

「はっ、はっ、はっ」

いつの間にか自分の呼吸がずいぶん荒くなっていた事に気付く。

ここがどこだかわからない。今の状況がわからない。恐怖で目が開けられない。「はっ、はっ、はっ、はっ」あたりに漂う匂いがますます強くなる。「はっ、はっ、はっ、はっ」両手に滴っていた水分は自分の体をつたい、足元を濡らしている。「はっ、はっ、はっ、はっ」わからない、何がなんだか全然わからない。。「キー！」何かの動物

の甲高い悲鳴。「ゴシャ！」何か柔らかい物を潰すような音。「ハハハ！」久しく聞いていない自分の笑い声。

「あ……」

驚愕に目を開く。そこに映る自分の両手は頼りなく細く白い。いつもどおりの自分の両手。荒い呼吸を整える。頭はまだ混乱しているが、さっきまでの恐怖はもう無い。頼りない安堵感が自分を包んでいくことがわかる。

それでも、未だ周りは真っ暗でここが何処だかわからない。もう、今みたいなのは嫌だ。そう思い、出口を捜す。右も左も後も後ろも全てが闇に覆われている。何かに触れることを期待して両手を無茶苦茶に振り回しながらでたらめに歩く。何も手には触れない。暗闇のせいで方向感覚も距離感も狂って、さっきまで自分が立っていた場所も判らなくなった。

不安と絶望感で泣きそうになったその時、「ガチャ」と何か扉を開けるような音がした。同時に、誰かがこちらに歩いてくる音。驚いて音のした方向に顔を向ける。自分を照らす強い光。暗闇に慣れた両目は順応できず、一瞬で視覚がつぶれる。それでも生き残った両耳が侵入者の声を拾った。

”さあ、茜。今日も勉強がんばろう！”

全身を駆け巡る嫌悪感。その意味もわからぬまま、体が勝手に声のした逆方向に駆け出す。

足をかけられ転ぶ。

自分を組みふすように乗りがかる巨軀。

細く白い両手を押さえる無骨な手。

咽返る様な匂いを放つ男物の香水。

「

」

目を覚ますと、須川茜は自分部屋のベットで寝転んでいた。どうやら眠っていたようだ。それに嫌な夢も見たらしい。全身が汗で濡れて気持ち悪い。外を見るとちょうど夕日が沈んでいく。空は夜に控えて紫色に染まっていた。

ぼんやりする頭で枕もとの時計を見る。もうすぐ晩飯の時間だ。ふと、気付く。

？

おかしいな？ 自分はいつ家に帰ってきたのだろう

## 殉教者の背信

教室に入ると、窓際の席でゆっこが気難しげな顔をして外を見ていた。踏ん張るように足を肩幅まで広げ、両手で四肢をつぶされた子ウサギを抱えている。そして、思案げに眉根を寄せ、睨むように窓の外、校庭の隅を見ていた。

その場所には何も無い。まっさらな更地があるだけだ。

……それはきっと、私が思い出したいくないからだろう。だから、私にはそこに本来あるはずのものが見えない。

自分に優しく、都合のいい嘘の世界。

その場所に本来あったウサギの飼育小屋。おとなしく無害な命たちを囲う小さな箱庭。

恐らく学校側は、ウサギたちを飼うことで、思春期に突入する生徒達に命の大切さを教えているつもりだったのだろう。完全に想像ではあるが、まあ、体面上の理由としては当たらずも遠からずだと思う。

実際、ほとんどの生徒達にとって、ウサギは日々の日常の一部分として完全に溶け込んでおり、そこに深い哲学的な意味をいちいち見つけ出してはいないはずだ。

だからこそ、その飼育小屋でウサギが生きていることが当たり前だった。ある意味でのルール。変わらないはずの日常。だが、そんな日常の一部が強引に壊された。

命溢れる世界のすばらしさを体現するという理由で囲われたウサギ達は、その身をもって人間の悪意をありったけ体現したのだ。

命を奪わないように、しかし、逃げられないように、丁寧に潰された四肢。ウサギ達が動けないことを確認したうえで飼育小屋に火をつける。なんでそこまで酷いことを出来るのだろうか？ 想像しただけで、唇を噛み締めたくなるような嫌悪感を感じる。

恐らく明日、教室は大騒ぎになるだろう。身近に起こった残虐非道極まる事件。変わらない日常を壊したイレギュラー。恐らくほとんどの生徒達は大きな悲しみと、軽い興奮に包まれた非日常をイベント気分ですすの。他人事として。

だけど、ゆつこは違う。彼女はあの凄惨な事件を他人事として捉えるつもりはないようだ。

ゆつこの目が燃えている。比喻ではない。彼女の大きな瞳に映る燃え盛る飼育小屋。彼女の見る風景では未だ飼育小屋は炎上しているのだ。ゆつこは、私が目を逸らしたことから逃げずに真正面から対峙していた。

ゆつこの顔が怒りに歪む。それは、懸命に涙を堪えているようにも見えた。

「ごめんね。 ゆつこ……」

あまりの申し訳なさに、自然と謝罪の言葉が漏れた。

彼女の決意はあまりにも真つ直ぐで、眩しい。まるで奇跡のような尊い覚悟。私は聖女を崇める殉教者のような気分になっていた。

だけど、私は。

「ゆつこ。 あのね……」

ゆつこの肩に手をかけ、内緒話をするかのように、彼女の耳元に口を寄せる。彼女の目に映る炎のユラメキが眼前に迫ってくる。一瞬、焦げ臭い匂いと、肌を焼く熱気を感じた。肺が焦げる感覚を我慢しながら呟く。

「へ……？」

唐突にゆつこの瞳から炎が消失する。呆けた表情の彼女の両手は何も抱えていない。

「……んん？ おお！ 何やってんだ私？ んー……。とりあえず練習だな！」

勢いよく教室を出て行くゆつこ。その背中を見送りながら再度、  
「本当に……ごめんね」と、謝罪の言葉を口にした。

だけど、私は貴方の覚悟を壊してしまう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0830m/>

---

心層探索

2010年10月9日01時10分発行